

6. 染織試験場（繊維産業技術センター）に託すこと

高橋俊明氏は、かつての職場につきのようなことを願っている。

（1） デザインセンターとしての役割とタオル業界の駆け込み寺的存在

繊維産業技術センターには、愛媛県産業技術研究所全般のデザインセンターのような役割を担ってほしい。現在、愛媛県にはデザイン部門を担当する技術者・研究員が数名しかいないが、その大半を繊維が占めている。少ない人材を分散させるよりも、今治の繊維産業技術センターに集結させて、総合的な情報収集や情報提供をおこない、研究の方向性を決め企業へ還元できる場所になってほしい。

同時に、レファレンス機能をさらに充実させて、企業が知りたい情報や資料がいつでも利用可能であり、技術提供や支援ができる駆け込み寺のような役目も果たしてほしい。

ここでひとつのエピソードをつけ加えたい。2008年に愛媛県下の工業系4試験場が統合され、愛媛県産業技術研究所が誕生したが、デザイン部門については繊維産業技術センターの人員移動はなかった。これよりも前に、県内4試験場のデザイン部門をひとつに統合して、松山にその拠点を置こうという話がもち上がっており、設置検討委員会が設けられていた。しかし、繊維産業試験場が県下デザイン関連事務所などへアンケート調査を実施し、県内のデザイン従事者数の地域別統計を整理した結果、県内のデザイナーの圧倒的多数が今治におり、またデザイン部門の研究員のほとんどが工業系4試験場のなかでも今治の繊維産業試験場に所属していることがわかった。高橋氏らは、この事実を踏まえ、デザイナーが産地にいるからこそ意味があること、それゆえに今治にデザイン部門の拠点を置くのがもっともふさわしいことを設置検討委員会に訴え、この話を振り出しに戻したことがある。もしこのとき無抵抗だったら、いま頃、今治にデザインの技術者はいなかったかもしれない。

（2） 企業の技術開発の拠点

繊維産業技術センターの開放試験室や機器をより充実させることによって、各企業が技術開発を進めるうえで、その拠点となってほしい。

（3） たくさんの人が集う場所

タオル業界の人びとはもちろんであるが、一般の方でもタオルを知りタオルに興味をもってもらえる、そのような機会を提供できる場所になってほしい。そのためには、繊維に関するさまざまなイベントや展示会、織りや染色、デザインに関する体験型イベントなどを開催し、一般の方が気楽に立ち寄れて、いつも人で賑わっている場所を目指すことである。

（4） 新技術センターにふさわしい人員配置

箱が立派でも中身がなければ意味がない。歴史ある産地を守るためにはそれなりの人材が必要である。関連研究機関の研究員の再編や重点分野の統合、正規職員外の産地リタイヤ組の人材活用など、多面的な視点で人材を配置してほしい。

7. 座右の銘

高橋氏の座右の銘は、「我が道を行く」である。以下、インタビューの当日、高橋氏からいただいたレジュメに書かれた言葉をそのまま引用したい。

浅く広くの知識でよい。わたしは敢えてプロにはなりたくなかった。誰が何と言おうが自分の信念を貫く。わたしはタオルのプロにはなりたくなかったし、なる気もなかった。わたしはいつまでも素人でありたかった。技術屋はさまざまな知識を詰め込み、誰からもあの人には凄いとされる人間になろうとみんな努力している。とくに、公務員で技術屋とさえ、カチカチの固い頭で先生と呼ばれるような知識の持ち主

が自他ともに^{まる}〇の人（素晴らしい人）であり、知識のない人は^{ぼつ}×の人（ダメな人）である。

〇の人は、裏を返せば、頭のなかはタオルの知識で埋め尽くされている。×の人は、全部詰め込まれていないため、まだ他の知識を詰め込む余裕がある。わたしは敢えて×を選ぶことにした。頭のなかで他のことを考え、人の意見をうけ入れる空間がたくさんほしいからである。物事を考えるには発想が一番大切である。新しいものに目を向けるには相当柔軟な頭がなければならない。常識で物事を考えていたら、新しいものは発想できない。そのため専門知識を隙間なく、詰め込みたくなかった。その結果、技術屋からみれば、×の人と評価されていたとおもう。組織のなかには×の人がいないといけない。

×の人の発想を〇の人が実現することで◎になる。足りないところはみんなが補充し合うことで、よりいっそう完成度の高いものができる。プロ同士のモノづくりは、消費者ニーズを置き去りにしてしまう危険性がつよい。独りよがりの知識であってはならない。

$$\text{〇} + \text{〇} = \text{〇}$$

$$\text{〇} + \text{×} = \text{◎}$$

幸い、試験場には織りや染め、デザインなどそれぞれの専門分野があり、それぞれのプロが素晴らしい知識をもっている。わたしがいくら努力してもその分野のプロにはかなわないならば、素人的発想のものをそれぞれの分野のプロがプロジェクトを組み、商品開発するのが正解である。

高橋氏は、みずからの役割を理解し、それを演じてきた。つねに一步引いたところで業界を客観視し、水が淀まないように流れをつくる。タオルづくりはプロの仕事だが、つくったら終わりではない。つくったタオルを人びとが使って、はじめて意味をもつ。だからこそ、モノづくりには柔軟な発想が要求される。

モノづくりのプロの傍らに、型破りな、高橋氏の言葉を借りると、素人がいたからこそ、染織試験場は時代のニーズに応えることができたのだろう。

8. 若い世代に向けてのメッセージ

「あまり専門的な知識を詰め込まないで、頭の片隅に少しだけでも隙間を残してほしい。その少し残った隙間で人の意見を聞く耳や、もっと大きな視点で物事の判断をしてほしい。」

高橋氏が、次世代を担う若者たちに伝えたいメッセージである。

このメッセージには、つぎのような思いがある。作り手と使い手の間には溝がある。この溝を埋めるには一人の完璧なプロより、たくさんの方が係わる方が、使い手の求めているものに近づけるのではないか。本物のモノづくりには、本業以外にたくさんの方に目を向ける必要がある。世の中の動きや人びとの日常の生活を知らないで、使い手が求めているもの、売れるものはわからない。作り手の自己満足であってはならない。

そして、歴史の重みについて、もうひとつメッセージ。現在の技術からみれば、「昔の人はこんなことしかしていなかったのか」とおもわれるかもしれないが、それが現実である。10年をへてやっと成し得たことが、現在ではコンピュータなどの技術の進歩によってより優れたものが簡単にできる時代になっているが、昔と今は時間の進み具合が違うのである。しかし、「小さな積み重ねにより技術も機械も進化し、現在に至っているのである。モノの進化はおなじようなことの繰り返しから起こる」のである。「感じる感じんは別にして、試験場にしろ、産地にしろ、いろんな歴史が積み重なって、その少しずつのものが積み重なって、知らず知らずのうちに新しいものに変わっていきよんでしょうね。」


1990年代以降、タオル関連の企業は減少してはいるものの、今治がタオル産地として残っているのは、技術があったからである。

いまではタオルを象徴するパイルがない商品もどんどん出てきて、新しいものが市場に登場しているが、「タオルの原点である、パイルを忘れてしもうたらいかんのよ。やっぱりそれは、どこかの隅に残って、またやがてそれが産地を救うものになってほしいし、共存しながらね、やっぱり生き残ってもらわんと」と高橋氏は言う。

9. お薦めの本

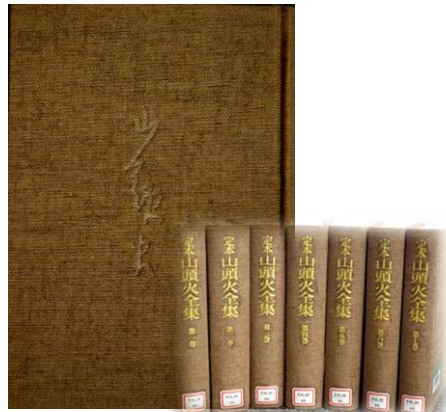
「感銘をうけるような愛読書はないが」という前置きのあとに、高橋氏は「とにかくインテリア雑誌、建築関連雑誌、ファッション雑誌、通販関連雑誌、婦人雑誌などさまざまな分野の雑誌をなるべく多くみるようにしている」と語ってくれた。また、書籍のみならず、大型商業施設や百貨店、スーパーなど流行の発信地や流通の最前線に出かけ、いまの世の中をおぼろげながらも感じるようにしているという。

現在は「ギャラリー 遊」の主催者として活動をしているが、かつてのタオル業界の素人は、タオルの枠を超えていまでも孤高のクリエイターでありつづけている。

最後に、高橋氏から教えてもらった種田山頭火  の「タオル」の句と、地場産業振興センターが公募したタオルに関する句の入選作の一部を紹介して締めくくりたい。

また旅人になるあたらしいタオルいちまい

種田山頭火



『山頭火全集』第1～7巻 春陽堂書店
1972～1973年
(今治市立図書館所蔵)

公募入選作

色褪せたタオルの端に子の名前
こら待てと孫追いかけるバスタオル
やわらかなタオルを頬に押しあてて
ふと思い出す母のぬくもり
廃業のタオル織機へ酒そそぎ
深くお辞儀をせし母なりき
悔しさがタオルに浸みる甲子園
湧き水にタオルを浸す島遍路
タオル掛け添い寝の孫に夢つのである

（完）

（文責・インタビュー：辻智佐子）

編集後記

待合せ場所は、愛媛県染織試験場があった旧施設（今治市東村南2丁目）の玄関前。高橋俊明さんとは今回のインタビューではじめてお会いするので、もちろんお互い面識がありませんでした。「すぐにわかるかな?!」と一抹の不安を抱きながら待合せ場所に到着。でも、その不安は一瞬のうちに飛んでしまいました。高橋さんは、オレンジ色と水色のストライプのTシャツをおしゃれに、そして自然に着こなされており、一目で「あ、高橋さんだ」とわかりました。芸術家のおいがブンブン。

その後、高橋さんの車に乗せてもらい、インタビュー場所の「ギャラリー遊」へ。高橋さんが主催する、唯一無二のカフェ&ギャラリーです。「熱い話」に耳を傾けながら、カフェ自慢の薫り高いコーヒーとおいしいチーズケーキをいただきました。今治で再訪したい場所が、またひとつできました！（辻）





高橋さんが主催するギャラリー&カフェ「Gallery 遊」

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の八人目は、武智商店の代表取締役社長を務める武智スマ氏である。小柄ながらもパワーみなぎる女性企業家である。タオル業界が活況を呈していた時代もそうでない時代も、「信頼」という強い経営理念を武器に事業を維持、拡大してきた。今治タオル工業を支えるタオルメーカーの歴史といまを、武智スマ氏率いる武智商店をとおしてみる。

